Nara Women's University

日本における都市の初現-纏向遺跡の調査から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学21世紀COEプログラム 公開日: 2011-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本,輝彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2741

6　日本における都市の初現 ― 纒向遺跡の調査から

桜井市教育委員会　橋本　輝彦

桜井市教育委員会の橋本と申します。よろしくお願いいたします。昨日から先生方の発表で海外の色々な事例のお話を聞かせて頂きました。私の方は、奈良県桜井市にあります纒向遺跡の調査の状況の報告をしてくれということですが、纒向遺跡の持っている属性、まだ調査そのものは全体の５％弱しか進んでおりませんので具体的な内容の細かいところまでは中々難しいのですが、遺跡の持っている属性が果たして都市の条件にかなうものなのかどうなのか、その辺私なんかは全くの門外漢でありますので、研究をリードしている先生方に纒向遺跡の情報を提供して、都市と考えていいのかどうかを御考えいただく材料になればというふうに考えております。

資料の方は後ろの方に図面などを添付しております。今日はパワーポイント等準備しておりませんので基本的にはこのレジュメに従って話をしていきたいと思います。纒向遺跡は、奈良盆地の一番東南部に位置しております奈良県桜井市の北部、ちょうど桜井市のすぐ北側に天理市という町があるのですが、桜井の北部から天理の南部にかけて広がっている遺跡になります。すぐ横には山辺の道が通りまして、大和古墳群という大和政権の大規模な古墳群が展開しております。

遺跡そのものは発見されましたのがそれ程古い話ではありません。纒向遺跡という名前そのものは昭和46年、1971年の発掘調査によって大規模な集落遺跡が存在するということが確認されて有名になった遺跡でありまして、まだそれ程発見から日がたっていないというような状況のものであります。この、今申しました1971年から始まりました纒向遺跡の調査、一番初めは第１次から第７次という調査が小学校の建て替えですとか県営住宅の建て替え・新築ですとかそういった大規模な開発に伴う発掘調査というものが行われまして、当時橿原考古学研究所におられました石野博信先生、関川尚功さんの調査によって色んな属性が見えてきて、少し特殊な遺跡ではないかというふうに言われるようになったということであります。その第1次から第７次の調査で、一番初めに注目されましたのが、一つは纒向石塚古墳という前方後円墳の調査が行われまして３世紀に遡る前方後円墳が纒向遺跡にあるということが確認されました。これはすぐ近くに存在しております矢塚古墳ですとか勝山古墳、あるいは東田大塚古墳といった同等規模の前方後円墳が点在している中で、そういったものが３世紀に遡る、当時国内では最も古い前方後円墳で構成される古墳群になるんじゃないかということで非常に注目されたのが一点。

それともう一つは纒向型祭祀とよく言われておりますが、直径が大体４m、深さが1.5m、深いものですと２m弱位の円形の土坑を掘りまして、基本的には湧水点―水が湧いてくるレベルまで―土坑を掘り下げて、その土坑の周りでおそらくものを食べたり飲んだりとい

うような飲食を伴った儀礼を行って、その際使用した道具はマツリの終わった段階で、火で燃やしたり、打ち欠いて処理した後に土坑にそれを投棄するというようなマツリのやり方なです。そういった纒向型といわれます祭祀跡というのが非常にたくさん見つかってまいりまして、当時調査担当者でありました石野博信先生はそのマツリの中の道具立て、使われていた道具の内容が『延喜式』などに出てきます新嘗祭に使われる道具立てと非常によく似通っているということで、そういう新嘗の儀礼と食国（ヲスクニ）の儀礼を行ったのではないか、ニヒナメ・ヲスクニ儀礼の一番初現になるのではないかというような指摘をされております。後述致します纒向遺跡の性格上から考えても後の王権の重要な儀礼となるようなマツリ、比較的国家的なマツリというか、そういったものが既に執り行われていたのではないかということも注目された一点ということになります。

それともう一つは、今奈良県あるいは近畿の中で年代の物差しの一つとなっている纒向編年と呼ばれる大量の出土土器を用いた土器編年が確立されまして、近畿圏での比較的広域な土器編年の物差しが作り上げられたということで注目を浴びたということがあります。遺跡の構造的なものも当時幾らか分かっておりまして、一つは纒向遺跡の中には農業用ではないと思うのですが、石野先生の原稿なんか見ますと灌漑というふうに書かれております。おそらく灌漑というよりは都市というか、村の中の生活の用水・排水を処理するためのものだと思うのですが幅が大体５～６m位あるような人工的に掘削された水路の存在というのが確認されております。この水路は溝の両側を、非常に大きな幅が70~80cm位あるような板材を加工した矢板で護岸工事がされておりまして、かつその溝の掘削の方向性といいますか方位もかなり地形に逆らう形で溝の掘削が行われております。基本的に纒向遺跡というのは、東西に東が高くて西が高いという地形的な特徴があるんですが、それに逆らうような形で人工的な水路が掘削されており計画的にマチ、ムラというものが作り上げられたのではないかというふうに考えさせられる一つの材料になっております。

それと、集落内に住まう人々の様子なんですが、これを知る手掛かりには遺跡から出土する土器があります。纒向遺跡出土の土器は在地産のもの以外に他地域からの搬入土器が非常にたくさんあるというのがこの遺跡の特徴でして、この第7次調査時の分析データでは、大体15%位、現在では大体30%位のところもあるんですが、出土土器の大体15～30%位が他地域の土器で占められるということであります。ほとんどが外来のそういう、たとえば東海系の土器ですと東海の土で作ったものが出てくるのですが、中にはいくらか在地の土で作った、纒向遺跡の土で作られた東海系の土器といったものもございますので、一定の人数が纒向遺跡に居住して土器作りまでをやるような比較的長期の滞在というのも纒向遺跡の中ではあったのではないかというようなことで、古墳時代前期の遺跡としては非常に特殊な要素を持つということであります。他の地域に行きますと、大体全体量の15～30%位の外来の土器を持つ遺跡というのもあるにはありますが、纒向遺跡の一番違う部分というのは、量は少ないですが西は九州、北部九州地域から東は関東地域に至るまでのほ

ぼほとんどの地域からの搬入土器が存在するということで15～30%の内訳が他の遺跡とは比べようもない位広い範囲からの土器を集めているというような状況があります。

さて、今までのお話で纒向遺跡の持つ特殊な属性というのが5つ位は見えてきたということなのですが、7次調査以降の調査は桜井市教育委員会にも発掘担当技師が入りまして現在までに156次の調査が行われているという状況であります。156次に至るまでの調査の中では他にも様々な知見というのが得られておりまして、今日も後でパネラーの寺澤薫さんが出てこられると思うのですが、昭和59年には寺澤さんが論文で纒向遺跡のその後の調査を整理して８つの特質を指摘されております。

詳しい内容をみていきますと１の属性と言いますのが、集落は規模が極めて大きくて前段階の弥生の拠点的な集落規模をはるかに上回るばかりではなくて同時期の集落にも同等の規模を持つものは皆無であり、非常に集落規模が大きいということがあります。図１・２の方には、纒向遺跡の大まかな範囲図を付けております。寺澤さんの論文が書かれた段階と言いますのは、実は纒向遺跡の規模は大体１km四方くらいの範囲が考えられておりました。この図面でいきますと図１の「庄内式期の中心地と遺構の広がり」という地図を付けておりますが、この図面で大体丸で囲ってある範囲、これが大体１km弱位の範囲になるのですが、今では大体３世紀初頭位から３世紀の中頃位までの、纒向遺跡でも前半期の遺跡の規模が当時寺澤さんの示されたものとほぼ匹敵するのかなというふうに思っております。昭和59年の段階でも他と比較するものがないくらい非常に大きな規模を持つ遺跡であったということであります。

現在は調査が進みまして、図２には布留式期の中心地と遺構の広がりという地図を付けております。大体３世紀の中頃位、土器の編年で言いますと布留０式という時期なのですが、この布留０式から布留１式までの間の段階になりますと東西大体２km、南北が1.5km位まで遺跡の規模が大きくなるという様相が確認されています。東・西・南側に関してはこのエリアを超えて遺跡が出てくることはまず無いというようなことが最近までの調査で分かってきておりますが、北へ向かっては、ちょうどこの北のライン、天理市という行政区分が違う自治体へ入っていっております。今日は天理市教育委員会の青木さんも来られておりますので、後でお話をして頂いてもいいかと思うのですが、天理市の柳本の地域も庄内式の古相の遺構ですとか布留０式位の遺構とかがさらに北へ向かって点在する様子が調査で確認されているようですので、もう少し調査が進んでくれば北へ向かっていくらかは遺跡が広がっていく可能性もあるのではないかというふうに考えております。

さて、先ほど見ていただいた地図には中心地？というキャプションの付いた地点があったかと思いますが、纒向遺跡の集落構造を考える上で重要な要件に遺跡の中心となる遺構がどこにあるのかということがあります。今想定しております中心遺構の所在地は2か所があります。纒向遺跡の前半期の段階、庄内式の段階と言うのは図１の上段の丸で囲った集落範囲の右上、東北部分のところに少しスクリーントーンで濃く網を掛けているところが

あるのですが、どうもこの辺りに3世紀前半段階の中心地・中心施設があるのではないかというふうに考えております。大体この辺りでは遺跡の標高が70m前後位の場所でありまして、周りに展開する一般的な居住域とさほど高低差がないところに中心地が存在するのではないかというふうに考えております。図2の時期になりますと3世紀の中頃以降、3世紀後半段階の中心になると思うんですが、集落の中心域が東の山手の方に移るんではないかと考えております。この段階になりますと大体標高が80～90m位の段丘上に、集落そのものは扇状地堆積の上に展開しておりますが、どうも段丘上に居館域というものが移る可能性があるのではないかというふうに考えております。

それと、2番目に挙げておりますのが集落の出現が突然というか、唐突に出現するという事柄があります。この遺跡は廃絶の仕方も同様なんですが、今までの調査では纒向に先行する弥生時代後期の遺構というのはまだ6か所、156次の調査の中で6回しか確認されておりません。確認されているのはいずれもが弥生時代後期の溝ですとか土坑とかでして、遺構の密度というのは非常に希薄な状態です。たまたま調査区のなかに弥生の土坑が一基引っ掛かってきた、あるいは溝が引っ掛かってきたという程度の在り方でして、後期の段階ですと奈良盆地の中には、田原本町の唐古・鍵遺跡ですとか桜井市では坪井・大福遺跡ですとかそういった拠点的な環濠集落が多く存在している中で、纒向の地域というのは完全なる過疎の地域であったことが調査で分かっております。そういう弥生には過疎地であった纒向の地が土器編年でいいますと庄内0式、3世紀初頭段階に入りますと突如として、大体直径1km位あるような大きな集落が突然現れるというような状況があります。それと先程の図2でも見ていただきましたが、庄内式から布留式にかけての最盛期には2km×1.5kmと大きな面積を持つ纒向遺跡なんですが、この最盛期が終わると同時に、というかピークのままに遺跡が廃絶を迎えます。現実には4世紀の初頭段階位にはほとんど纒向遺跡というのはなくなっているんではないかと考えています。発掘調査では、この後に続く布留1式と言われる段階の土器、4世紀の初頭から前半段階のものですが、遺跡からは遺構や遺物もいくらかは発見されておりますが、数量的にはそれまでの段階とは比べようもないくらい密度が下がっている状況ですので、ほぼ100年間の間で纒向遺跡というのは無くなってしまうと、忽然と無くなるというのも特徴の一つであります。

3番目に挙がっておりますのが先程の石野先生の調査、1次から7次のときの内容と少し重複しますが、それまでの近畿の弥生墓制にはなかった前方後円墳が3世紀の段階で築造が開始され、纒向石塚・勝山・矢塚・東田大塚などの古墳が歴代築かれるということがあります。図3には各古墳の墳丘図を付けておりますが基本的にこれらの古墳は纒向型と呼ばれる共通した墳丘規格に基づいて築造されたものだと考えられておりまして、ここでは詳しく触れませんが、全長に対して後円部径、前方部長が3:2:1の比率を持つこと、著しく低い前方部を持つこと等々の特徴を持っています。こういった国内でも最古・最大級の古墳がここに5基、確認されているものだけでも5基は存在していたということがあり

ます。

基本的にはこれらに纒向遺跡の首長層が葬られていると思っていますが、後の討論で遺跡の中の階層性という問題も出てくるかと思いますので、あわせて纒向遺跡内の他のお墓についてもご紹介しておきたいと思います。次の図４にも図を付けておりますが先に見た100m級の古墳以外に全長60m位の前方後円墳となる可能性が高い巻野内石塚古墳ですとか、全長28mの前方後方墳であるメクリ１号墳、こういった少し規模の小さな古墳の存在が注目されます。巻野内石塚なんかは詳細な調査が行われておりませんのでよく分らないんですが、纒向時代の築造の古墳で良いとすれば纒向型の３分の２のスケールで築かれたものが存在していたことになります。また、メクリ１号墳は全長が28mの前方後方墳ですが発見されたときには盛土が全て削平を受けておりましたので、どの程度の墳丘を持っていたのか分りません。この古墳は墳丘規模が大体他の纒向型の３分の１位の規模を持っており、前方後円墳という墓制が確立される纒向遺跡の中で、大型の前方後円墳に葬られる者、あるいは前方後円墳でも３分の２スケール位のものに葬られる者、３分の１スケールの前方後方墳に葬られる者があることが判明しており、王権中枢部の中でも階層性、差別化が図られていたと言っていいと思います。

当然ながら、この他にも方形周溝墓ですとか木棺墓ですとか、土器棺墓、あるいは土坑墓ではないかと思われるようなものがいくつも確認されており、そういった纒向遺跡の中でのお墓の分布を付けております。この中の■は方形周溝墓、▲が木棺墓、●が土器棺墓ということで印を付けておりますが、纒向遺跡の王墓である前方後円墳の内、纒向石塚・勝山・矢塚・東田大塚古墳などは遺跡の乗っかっている扇状地堆積の先端部分、微高地から低湿地へと変換するような場所に築かれていたり、ホケノ山古墳や箸墓古墳などは纒向川の氾濫原に面するような地点、先ほどの地図では集落範囲の一番南端部に築かれており、遺跡そのものの外縁部に築かれているのに対し、一般構成員の墓と思われます方形周溝墓、あるいは土器棺墓、木棺墓の類のものは、各微高地の縁辺部に墓をつくるルールが傾向としてあるようです。この状況からは王陵区の設定があったと言っていいか難しいと思うんですが、お墓を持って行く場所というのをなんとなく規定している可能性があるように思います。

それと４番目に挙げておりますのが、農具である鍬の出土量というのが非常に少なく、土木用の鋤などが非常に多く出土する、というのが挙げられております。寺澤さんの作成されました農具出土遺跡の統計データを表２に付けております。昭和59年当時のデータですので最新のものではないのですが、皆さんご存知のようにそれまでの弥生の集落、あるいは同時期の古墳時代集落と比較しても鍬の出土量が、非常に少ないのがお分かりいただけるかと思います。当時はこの鍬・鋤の比率の分析から農耕の痕跡が非常に薄いという事が明らかにされていますが、今日までの調査で見ましてもこの傾向はほとんど変わっておりません。さらに、近年ではいわゆる花粉分析、プラントオパールなどの自然科学的な調

査もかなりの回数の分析をやって頂いておりますが、顕著な、例えば畑の作物であったり水田耕作の痕跡というのは確認されておりません。また、実際の発掘調査でも水田痕跡、あるいは畑痕跡というのは全く確認がされてないという状況にあります。まだ全体の５％ほどしか掘ってないのにそんなことを言っていいのかと言われると辛いですが、結論的に言いますと纒向遺跡というのは全く農業を行わない遺跡であると言っても良いのではないかと最近では考えております。

あと全部の項目を一個ずつ細かく見ていきますと時間がありませんので、少しとばし気味にいきますが５番目には図18～22に挙げましたようにキビ地域をルーツとする弧帯文様を持つ遺物が多く出土することからキビ地域との密接かつ直接的な関係が想定されることがあります。弧帯文様はキビ地域を中心に葬送儀礼に伴って発展したものであり、纒向遺跡ではこれらの祭式が直接古墳や集落での祭祀に取り入れられた可能性が高い。という項目がありますが、他地域のそういう吉備などの祭りの道具立てを取り入れて纒向遺跡の中で古墳の祭祀を行ったり集落の祭祀を行ったり、そういうようなことがおこなわれている。あるいは先ほど述べましたが近畿の中にもともとない墓制であるはずの前方後円形の墓も吉備、瀬戸内を中心とする弥生後期の墓制ですし、葺き石を葺く様なやり方もやはり近畿に元々ない、埋葬施設に鏡を納めるような風習も九州地域で多くみられたもので元々は近畿にはないと。そういった点を見ていきますと、この吉備からの弧文を用いた祭りの道具に代表されるように、纒向遺跡の墓制、あるいは集落内における祭祀の様式に国内の他地域の要素というものが色濃く取り入れられ、祭祀のスタイルか完成されている。このことは大和が当時の社会の中で圧倒的に優位で、大和がほかの地域を制圧したというような考えではなくて他の地域と協調関係・連合関係の中で纒向遺跡というものがつくりあげられたのではないかというふうに言われておりますので、こういうお墓あるいは集落内での祭祀にみられる他地域の要素の色濃さというのは、先にも触れた纒向遺跡の成立事情とも関係するものだろうと思っております。

６番目に挙げていますのが、搬入土器です。表１には昭和50年代当時のデータを示していますが、先程も申し上げた通り出土土器の傾向は現在でもほとんど変わっておりません。これら中でも圧倒的に多いのは、愛知県を中心とする東海系の土器が圧倒的に多く、全搬入土器の50％前後を占めるという在り方です。この他に最近の調査で増えてきているのは四国の阿波あたりの土器などがありますし、一番遠いところでは朝鮮半島製ではないかと言われるようなものも出てきておりますが、そういった搬入土器が非常に多いと。搬入土器の多くは炊飯用の甕であり、これで煮炊きをして食事をする訳ですから、搬入土器の比率がそのまま人口比率に反映される可能性が高いと考えられます。とすれば当時の纒向遺跡で10人の人に会えば1.5人～３人は外来の人が居たというようなことで、非常に都市的な様相を現すのかなというふうに思っております。

それと都市について考える中で関連してくると思うのですが、市場の存在の可能性とい

うものが7番に挙げられております。奈良盆地の東南部というのは、近世というか最近でも大和あるいは近畿から東へ向けての主要ルートの一つになっておりまして、伊勢街道と言われます東の三重県の方へ抜けていく街道が纒向遺跡のすぐ南側を東西に通っております。また、纒向遺跡からは北へ向けても山の辺の道なんかがあってその先には山城・近江方面への交通網が整備されておったというようなことも考えられますので、そういったことを勘案しますと地の利がよく交通の要所に位置していると、搬入土器が非常にたくさん出てくるという様相、各地の物資が集まってきているということも市的な機能の一端を現すと考えても良いのではないかと思います。

また、箸墓古墳は宮内庁の陵墓名称では倭迹迹日百襲姫大市墓とされておりますが、図11に示しましたように実際の発掘資料の中にも時代は新しいですが、「大市」と見られる文字の書かれた土器片があります。この「大市」という地名そのものが直接的に纒向の段階まで遡れるのかどうかは微妙ですが、本来何らかの交易のセンター的な役割（市）というものがあってこれにまつわる地名が「大市」として残ったのではないかと考えられております。なお、5～6世紀と後の時代になりますが『日本書紀』などでは桜井市内に海柘榴市という場所が出てまいります。当時は大きな市の存在した巷で、大阪湾・河内と大和川を介して大和を結ぶ船便の終起点になっていた場所と思われますが、そういうものも纒向遺跡のすぐ南側には存在しております。こういった状況を考えますとやはり早くから列島内に於ける中心的な市の機能がこの桜井の中にあってもいいのではないかと考えております。

さて、8番目には3世紀前半の太田地区検出の特殊建物の存在が挙げられております。これは私の先程の纒向遺跡の範囲図ですと庄内式期の中心地域ではないかというところにスクリーンの網をかけておきましたが、建物跡はこの部分から発見されました。図7の図面は柱穴の配置を基に木村さんという方が建物の復元案を作られたものです。これには正殿、宝殿等いろいろと描かれておりますが、周囲を柵列で囲った祭殿状の建物とその外側に並び倉のような施設の存在が確認されております。これらの建物規模そのものはそんなに大きな建物ではありませんので太田微高地の中でもこれが中枢の建物となるとは考えておりません。ひょっとしたらこれらの建物の東側に中心になるような施設が展開するのではないかと考えていますが、もうすこし調査の進展を待たないとそれ以上の構造は分りません。ただ、この建物は南北に方位をきちっと整えた建物であるということ、それとやはり通常の高床あるいは平地式の建物とは異なる構造を持つ施設であるということで、遺跡の中でもこういう重要な施設はちゃんと南北の方位を意識して建てられているということは注目していいのかなというふうに思います。当時は、この建物の復元案しか出されてはいないんですが、この調査区の平面図をよく検討しますとどうもこれらの建物群の外側にひょっとしたら方形の区画溝になるのではないかなというような溝の存在も推定されております。以上、8つの要素を駆け足でご紹介いたしましたが、昭和59年にはこれらの要素を持って

寺澤さんは纒向遺跡を「新たに編成された政権の政治的意図によって建設された、日本最初の都市」であるというふうに位置づけをされております。時間の都合もあり、私の紹介は非常に乱暴なところもあるかと思いますが詳しくは原点の論文を読んで頂けたら幸いです。いずれにしましてもこの論文以降、纒向遺跡を日本最初の都市に位置づける考え方がでてきたということであります。

さて、その後の調査でもこれを補強する、あるいは新たな特質が確認されるような調査の成果というのが幾つか出てきております。以下、9～12と新たに確認された纒向遺跡の特質を項目毎に見ていくこととしますが、9番は先程も申しました前方後方墳であるメクリ1号墳ですとか、あるいは巻野内石塚古墳などの小さな前方後円墳とか、そういったものの確認から首長層の墓制の中にも明確な階層性がある可能性が非常に高いということが解ってきたと先程ご紹介しました。

その他10番に挙げておりますのは、竪穴式住居が全く築かれないという点で、現在までの約150回の調査の中では通常よく確認されるような竪穴式の住居、弥生時代・古墳時代通じて最もポピュラーなものだと思うんですが、纒向遺跡では基本的には竪穴式住居というのは存在しないと考えております。纒向遺跡では、先程私が遺跡がほぼ廃絶していると申しました布留1式期になりますと竪穴式住居が逆に後から出てくるんですけれども、それまでの3世紀の初頭段階から布留0式にかけての間というのは、日本国内であれば当たり前に出てくる竪穴式住居というものが遺跡の中央部からは1棟も確認されていないという状況であります。検出されている住居のほとんどは平地式の建物というか、柱穴を掘ってそこに柱を立ち上げるという形の建物ばかりが確認されておりまして、おそらくは高床式の建物や平地式の建物で纒向遺跡の居住域が構成されている可能性が高いということで、同時期の奈良盆地内では当然ながら竪穴式住居というのが普通に出てまいりますので、同時期の周囲の遺跡と比べると纒向遺跡の集落景観は竪穴式住居の存在しない特殊な景観が展開していたというふうに言って良いだろうと考えております。

11番目に挙げておりますのは外来系の要素、特に朝鮮半島とか中国大陸との関係を意識した項目として挙げています。出土遺物では韓式系土器やベニバナ、あるいは図36に示しました漢式の三角鏃なんかを模倣したと思われる木製鏃とか木製の輪鐙、あるいは図31のホケノ山古墳などから出土している銅鏡などといった外来のもの、特に大陸系、朝鮮半島系のものが纒向遺跡には存在するというのも大きな特徴の一つです。外来の土器というのは図13に示しております纒向遺跡90次調査の家ツラ地区というところで出てきました土器です。1番の方、左側のものは菱形のタタキ目で下部にハケ目が入る土器ですけれども、瓦質土器というかそれに近い質感の土器であります。それと右側の2と付けておりますのはちょっとよく分りませんが土器の表面に黒色に発色するような塗布物を塗ってからミガキ調整を行うという変わった土器でして、故地が何処かという限定は難しいのですが見ていただいた先生によっては楽浪系の土器の中にあっても良いのではないかということを仰

る方もいらっしゃいます。あるいは勝山古墳の周濠の西側で行われました102次調査でも陶質土器の破片が出土しており、今後も外来系の土器の増加が見込まれます。それと図14には木製の輪鐙を図示しておりますが、おそらくは大陸から朝鮮半島を経由して乗馬の風習が纒向の首長層に伝えられたのではないか、こういうものも外来の要素としても見ても良いだろうと思っております。

さらに、図28には61次調査のベニバナの花粉を載せております。これは庄内の3式くらい、3世紀の中頃から前半にくい込む頃のものだと思いますが、この時期の溝の中からベニバナの花粉が多量に確認されております。このベニバナの花粉が出てきた溝は先述しました神殿状の建物などが見つかっている庄内式段階の中心施設の存在が推定されているエリアから流れてくる溝でありまして、検出状況からは染色に用いた廃液の流れてきたものが土壌分析で見つかったというふうに考えております。今のところベニバナの存在を示す国内最古の例でありまして、中国から朝鮮半島を経由してわが国にもたらされた文物ということになるのですが、染色の廃液が庄内段階の中心地域から排出された溝の中から確認されたということで、この中枢地域の一角にベニバナの染め物を行う染色工房の存在を考えて良いと思っております。他にも木製遺物ですとか、舶載の銅鏡とか、そういった外来の物もありますが、時間の都合もございますのでここでは割愛いたします。

さて、12番目には先ほどのベニバナの染色もそうですけれども、先進的な技術を持った工房の存在があります。これには鍛冶などの鉄製品の生産に関わるような工房ですとか、木製品の加工場、それも特殊な用途に限定した木製品を製作する工房などが確認されています。これらの工房に共通しているのは何れもが居館域に隣接あるいは含まれる形で築かれるという特徴がありまして、鍛冶と木製品の工房は纒向遺跡の範囲図でいきますと図2に示した布留式段階の居館域に隣接して見つかっております。ただし、鍛冶関連遺物の量からは大規模に鍛冶をやって纒向遺跡全体に鉄製品を供給するというような量の鍛冶を行っていたとは考えられませんのでおそらくは居館域に隣接して工房があって、居館域の中での利用に供するためだけに生産を行っていたのではないか考えております。これに対してその他の鍛冶工房というのは工房そのものはまだ見つかってないんですが、鍛冶関連資料の出土地点でいきますと纒向遺跡からは4か所位から点在して布留0式と言われる段階の資料の出土があります。傾向的には遺跡の中の幾つかの微高地の中に小さな工房が点在していたのではないかと思っていまして、あちらこちらにパラパラと小規模な工房が存在し、集落部に供給するものはこういった場所において生産を行っていたのかなと考えています。木製品の加工場跡というのも布留式段階の居館域から発見された鍛冶工房のすぐ近くから発見されています。通常、纒向遺跡の調査をやっておりますと、特に一般的な集落部分では土木用具などの出土が多いと申しましたけどもそれに従って通常はアカガシ亜属などの樫材、広葉樹を多用した木製品の加工場というのが一般的な集落部分でのあり方だと思うのですが、この居館域に隣接したところでの工房、木製品の加工場というのは基本的には

針葉樹を用いたものしか生産をしないという変わった内容であることが判明しております。遺物の内容も木製の形代、刀型をするようなものであったり、漆塗りの盾、あるいは案などのテーブル、木製の坏、何らかの祭祀用具と思われるような奇妙な形をした木製品ですとか、調度品の一部ではないかと思われるような部材の破片があったりということで、居館域に推定されるエリアの中の木製品加工場というのもおそらくは首長層のみに供給する木製品を作るという工房を付帯させていると考えても良いのかなというふうに思っています。庄内式の段階で見ますとまだまだ内容は判然としませんが、先程申しましたベニバナの廃液の存在からは初期段階の纒向の中枢域にもベニバナを用いた工房が付帯している可能性が高いということで、居館とそういう工房というものがセットで存在する可能性もあるということが最近の調査で分かってきております。

時間の都合もありますが、かなり駆け足で提示いたしました図面もあまり使わずに話をしてしまいましたが、今ご紹介いたしました纒向遺跡の持つ特徴の色々が先ほど岡村先生がお話をされました中国の事例の中でどのような段階に当てはまるのか、あるいは後の総合討論の中で他の先生方が纒向遺跡をどう捉えられるのか、様々なお話を伺えるのを楽しみにしたいと思っております。私の報告は以上で終わらせて頂きたいと思います。どうもありがとうございました。

宮路

橋本さん、どうもありがとうございました。続いてただいまの橋本さんの発表に関しましてご質問のある方、挙手をお願いいたします。

小路田

先程の王国との繋がりで確認しておきたいんですけれども、レジュメの75頁で古墳のことを遺跡内の首長層の墳墓というふうに仰られてますけれども、この首長層というのと、いわゆる王と呼ばれる人達とは同じですか、違うのですか。

橋本

少し原稿の書き方に問題があったかもしれませんが、基本的には纒向石塚古墳をはじめとする纒向型前方後円墳の中に王墓があると考えていいかと思います。ただこれは私も自分の中で判断できていないんですが、纒向遺跡の中の他の勝山、矢塚、ホケノ山、東田大塚古墳など、全長で100m位あるものが全部王墓なのか否か、纒向型という前方後円墳が王の入る墓のみに限定されているのかというのはまだ個々の古墳の築造時期などの属性が判明しておりませんので良く解らないところも御座います。ひょっとするとこれらの古墳の中に同時性があるものも含まれているとも考えられますので、よく検討していきたいと思います。ただ、纒向遺跡は極めて政治的なマチであるというふうに私は思っておりますの

で、他の地域から来た有力者のお墓というのが若干小規模な古墳、例えばメクリ１号墳であったり巻野内石塚古墳であったりする可能性はあると考えます。レジュメに記載しました「首長層」には他地域の首長そのものとは言いませんが、他地域から派遣された何らかの権力、ポストにある人も含めて纒向遺跡の首長層の中にある程度のランク、階層性というのがあるのではないかと考えてこういう表現をいたしました。

小路田

橋本さんのお考えだけ、もう一点だけ聞いておきたいのですが、先程のご報告だと公墓と邦墓は決定的に違う、つまり貴族であっても邦墓に祀られて公墓には祀られないという、この順列というのは中国社会にはあって日本の社会にはないのかというのが大きな問題だろうと思うんですが、逆に前方後円墳が５千もあるというのが大問題だろうというふうに思うんですけれどもそれはちょっと置いたとして、この纒向っていうのはこの地域の有力者たちの居留空間なのか、あるいは日本列島規模の国家の中枢としての都なのか、どちらだというふうにお思いでしょうか。

橋本

私は後者のほうです。国家としての中枢というふうに考えております。そういう意味では纒向型に葬られている人の、全ての纒向型がそうかどうかは別として、纒向遺跡の前方後円墳の中に邦墓的なものもあるかもしれません。公墓との違いについては先程のお話と同じで個々の前方後円墳の属性も含めて峻別していかないと、ということだと思いますが、果たしてそれが識別できる材料があるのか否かはよく分りません。

宮路

橋本さん、どうもありがとうございました。

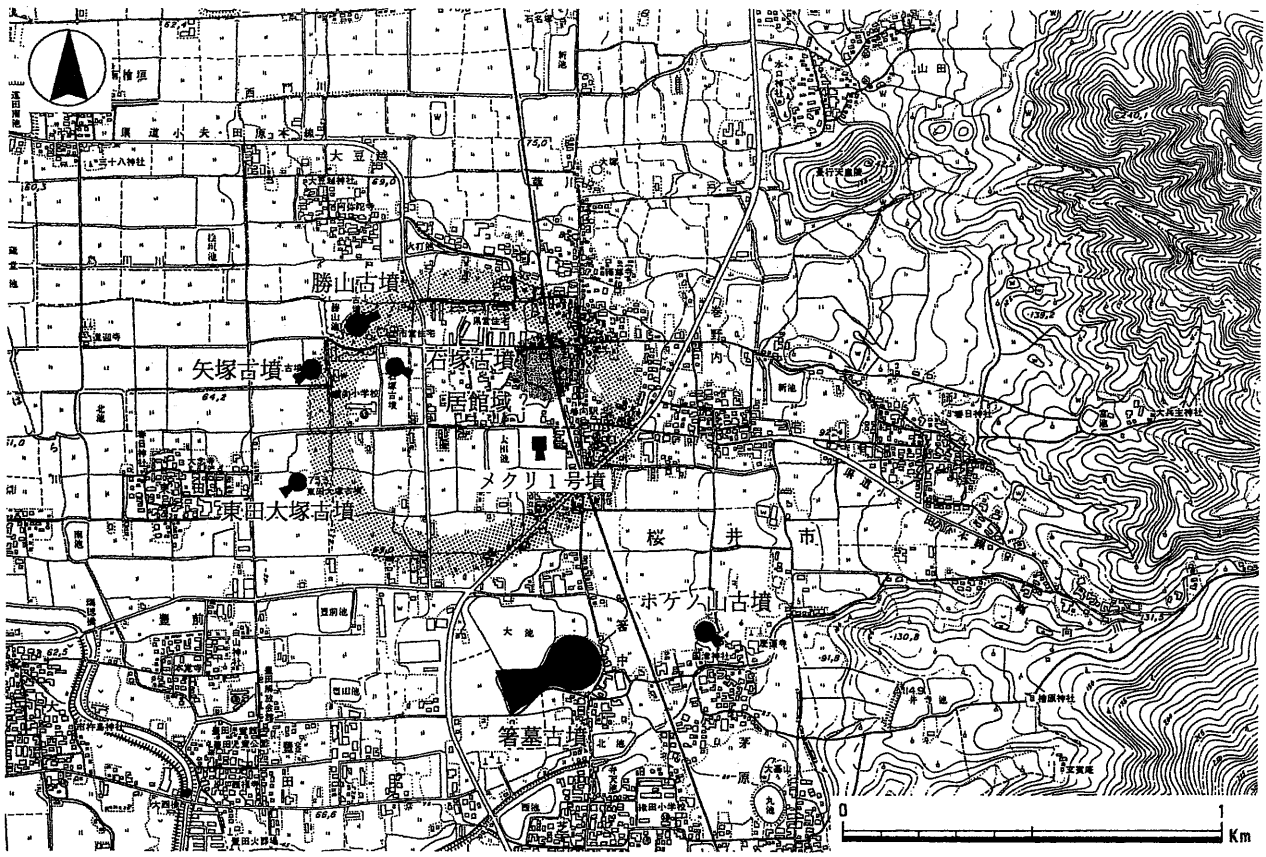


図１　庄内式期（３世紀初頭～３世紀中頃）の中心地と遺構の広がり
※この時点では東田大塚古墳・箸墓古墳は存在しない

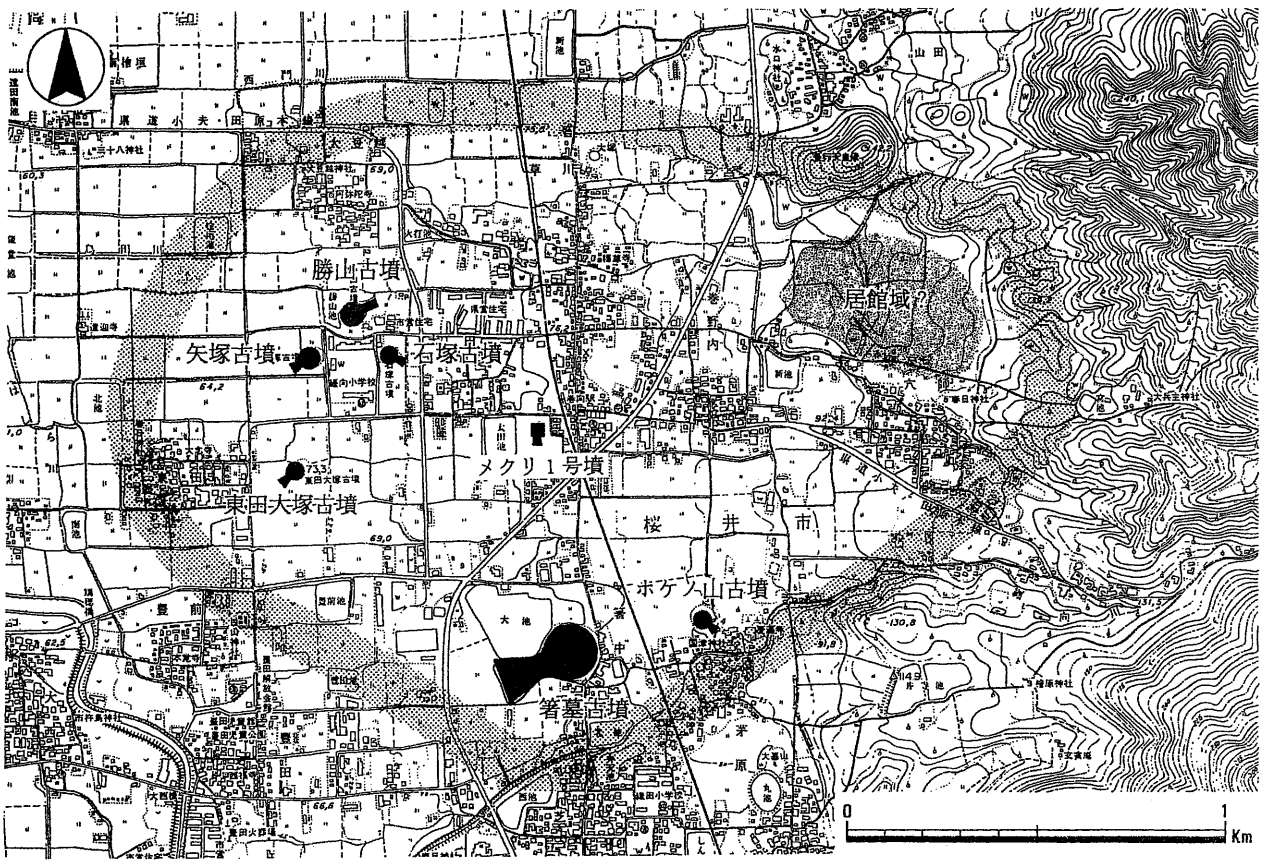
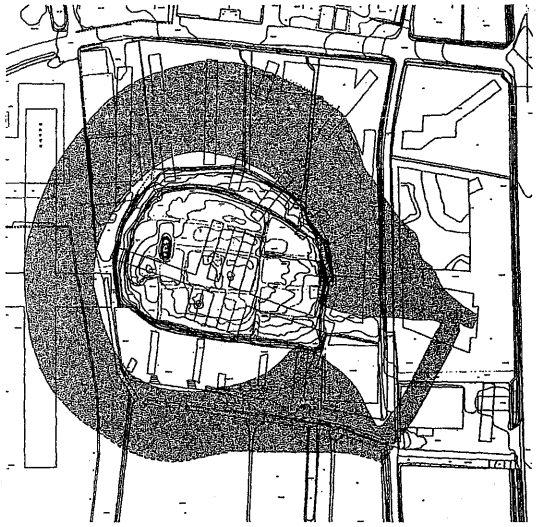
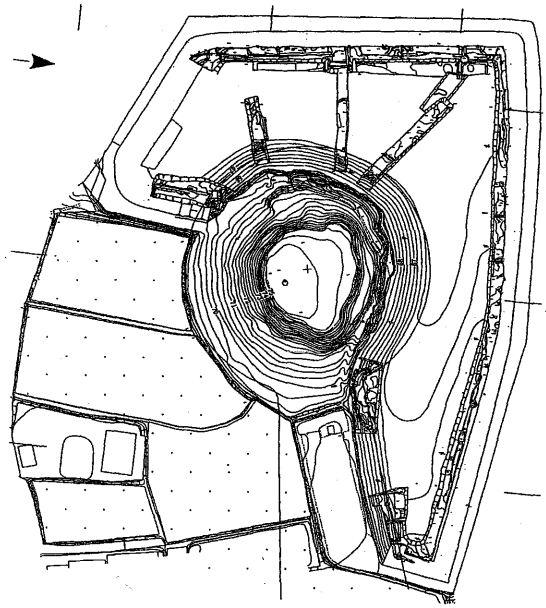


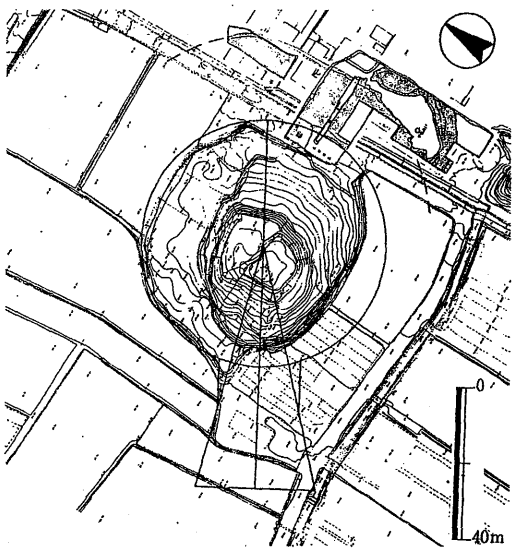
図２　布留式期（３世紀中頃～４世紀初頭）の中心地と遺構の広がり



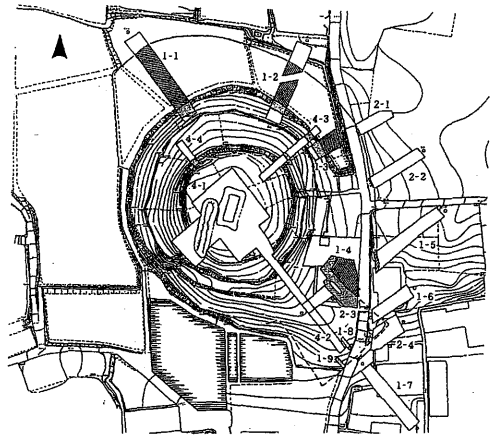
纒向石塚古墳（庄内１式期）



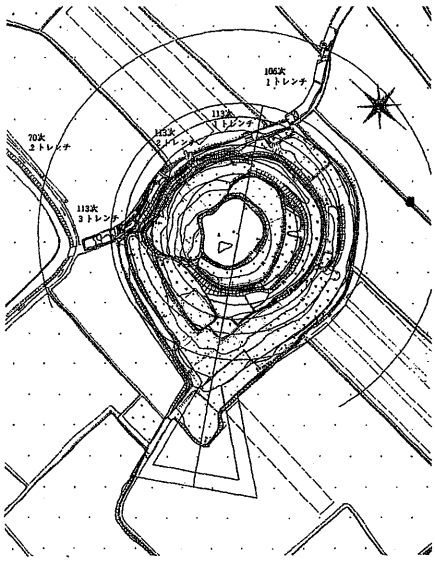
勝山古墳（庄内２式期）



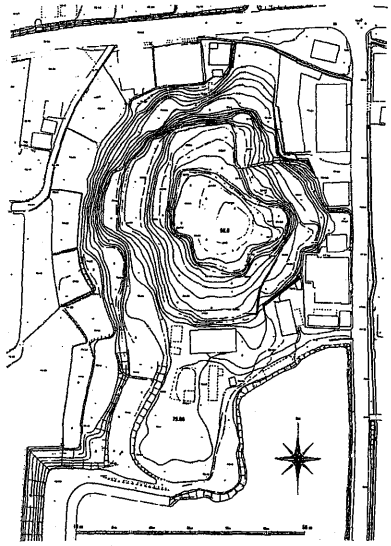
矢塚古墳（庄内３式期）



ホケノ山古墳（布留０式期古相）



東田大塚古墳（布留０式期古相）



石名塚古墳

図３　大和の出現期古墳１（１／2000）

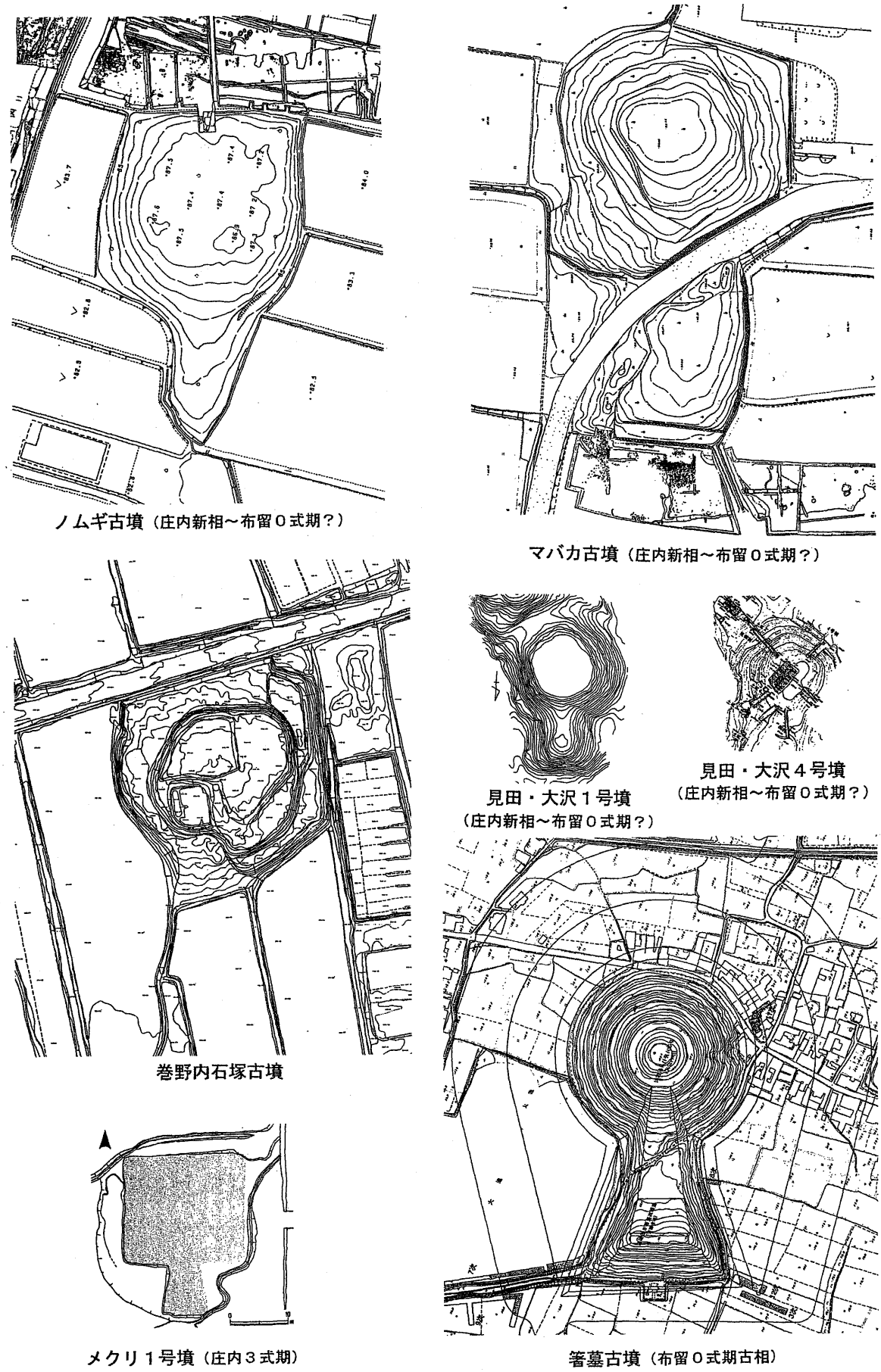


図４　大和の出現期古墳２（１／1000、箸墓のみ１／5000）

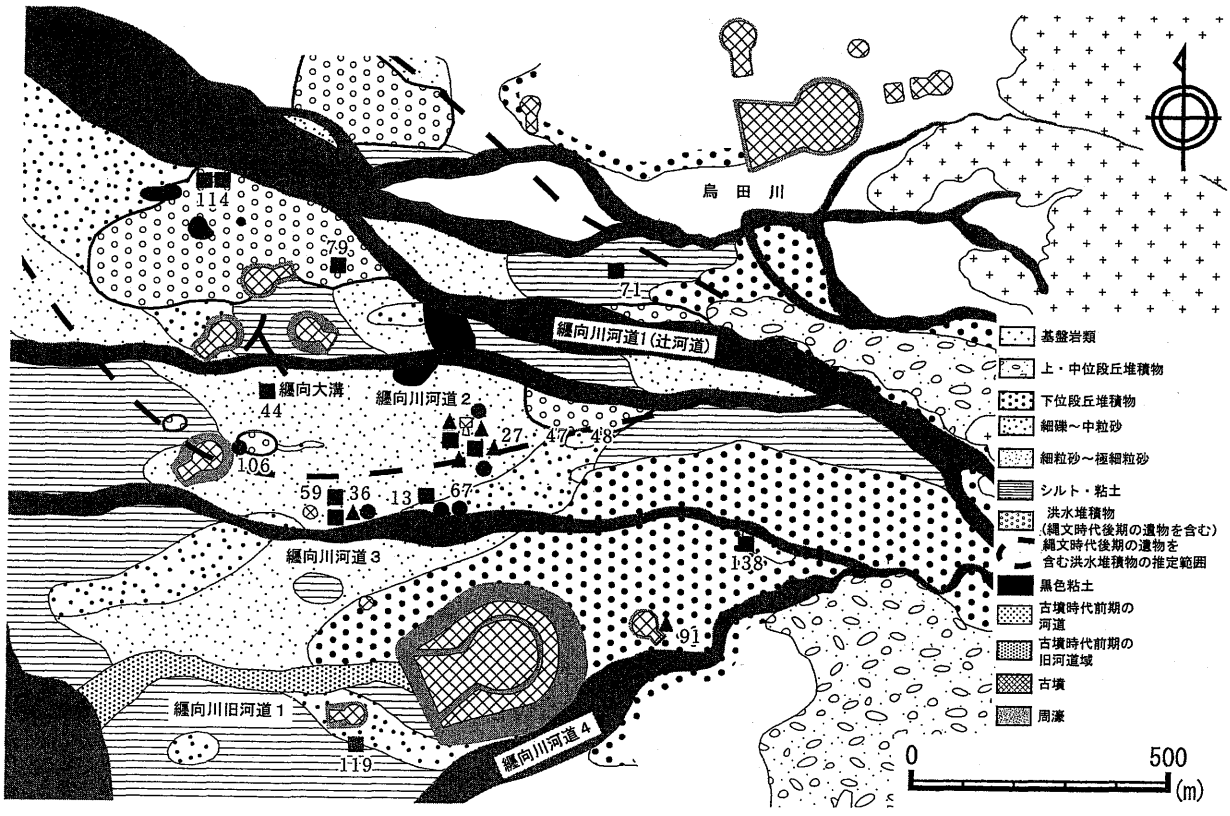


図5　纒向遺跡の墳墓の分布
(■方形周溝墓　▲木棺墓　●土器棺墓　数字は調査次数)

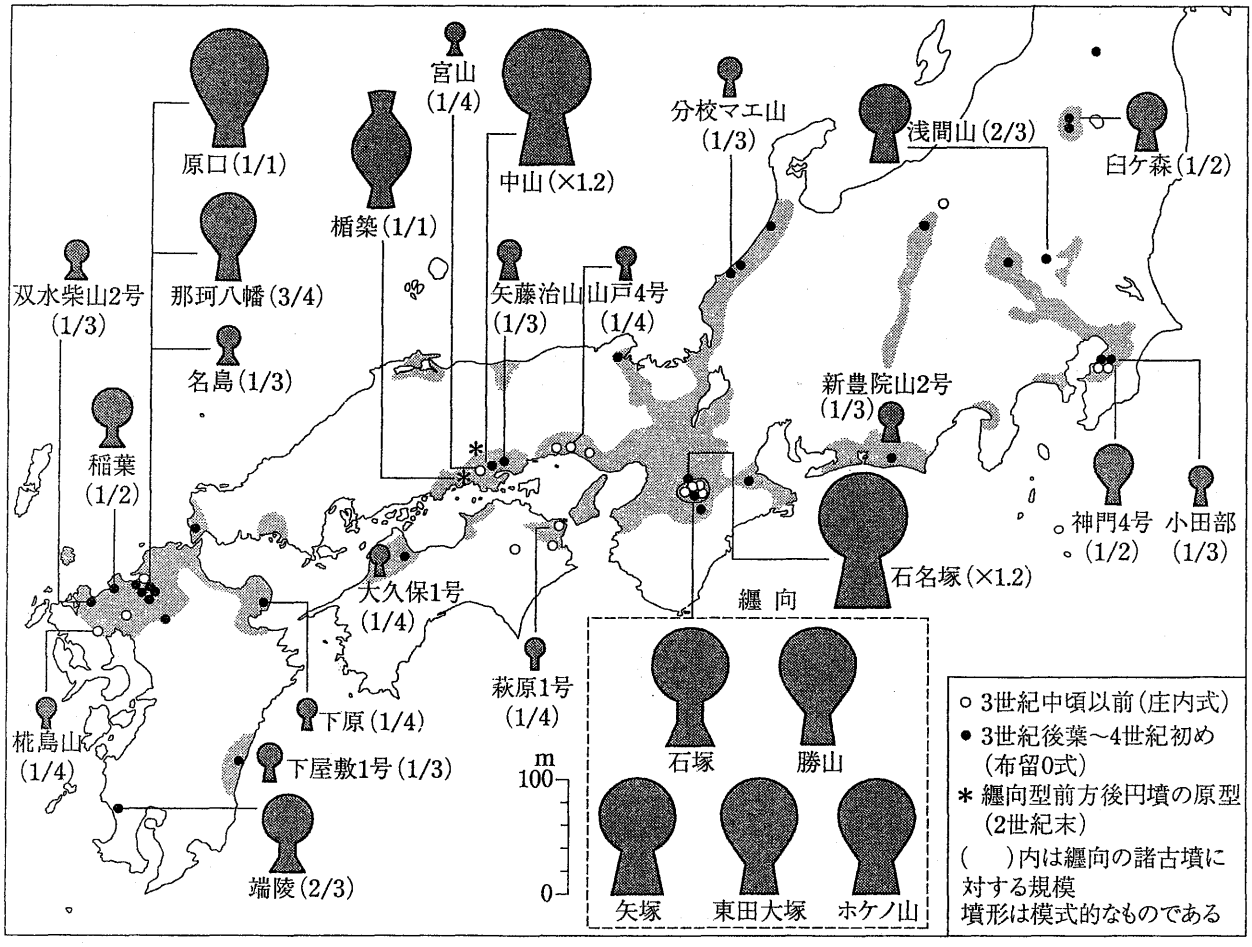


図6　纒向型前方後円墳の分布 (寺沢2000)

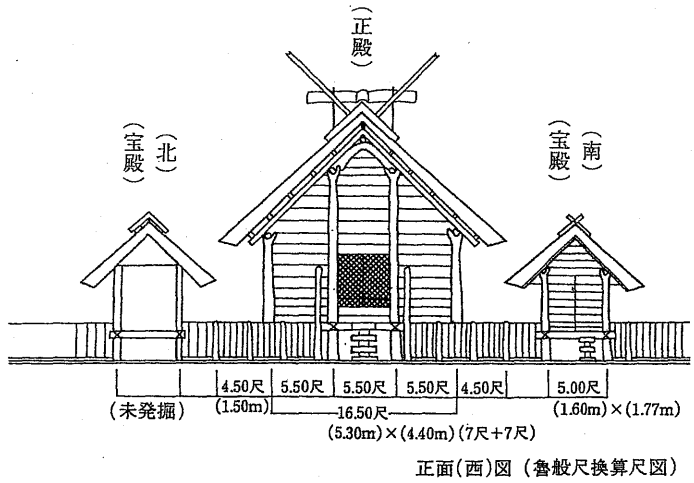


図７　太田地区検出の特殊建物復元案（第20次）

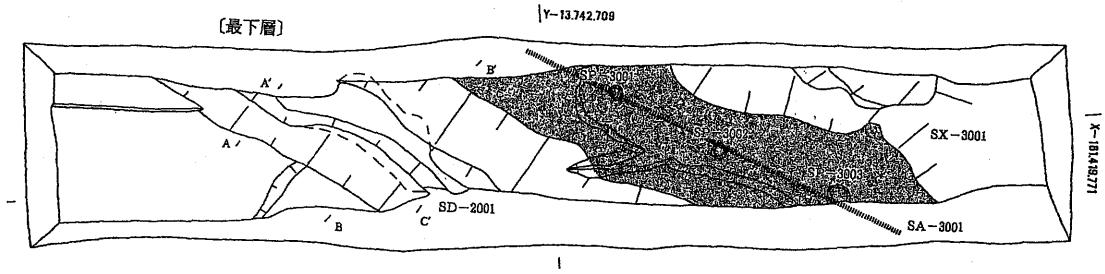


図８　尾崎花地区のV字溝と土塁・柵列（第80次　1／100）

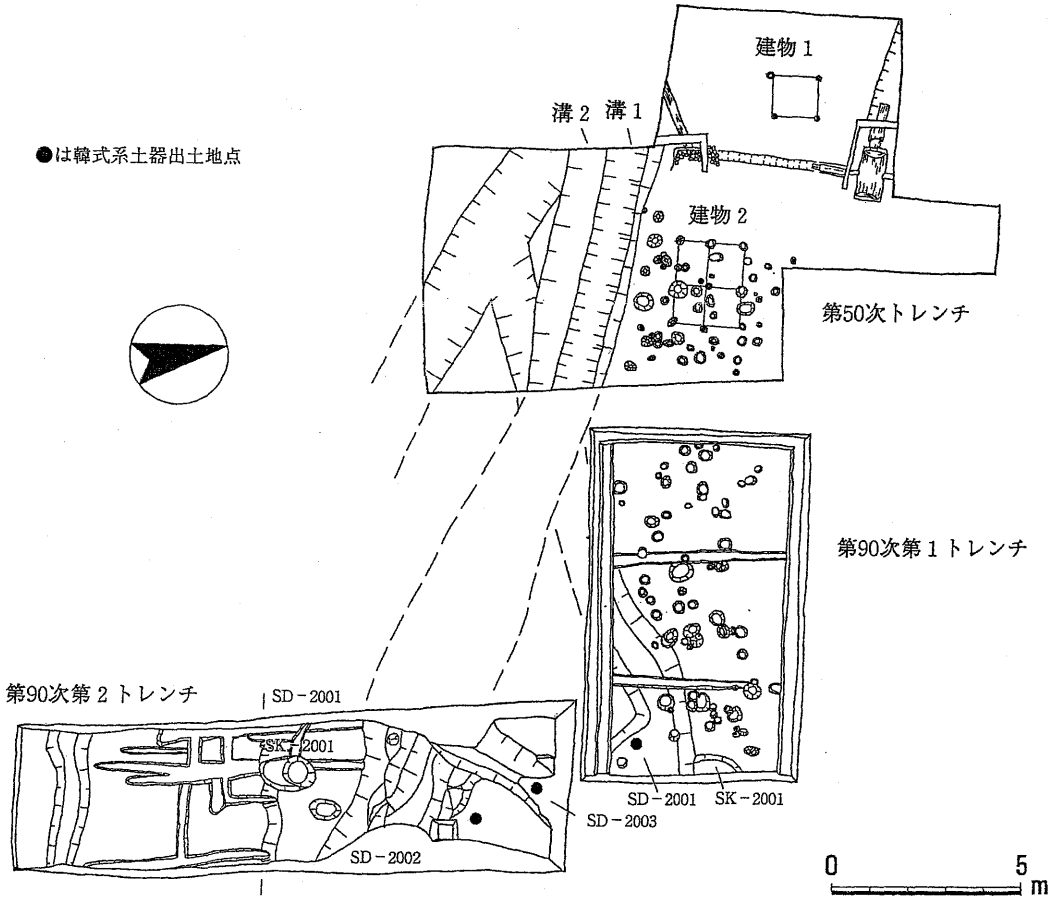


図９　家ツラ地区平面図（第50・90次　1／200）

図10　纒向遺跡から出土した搬入土器

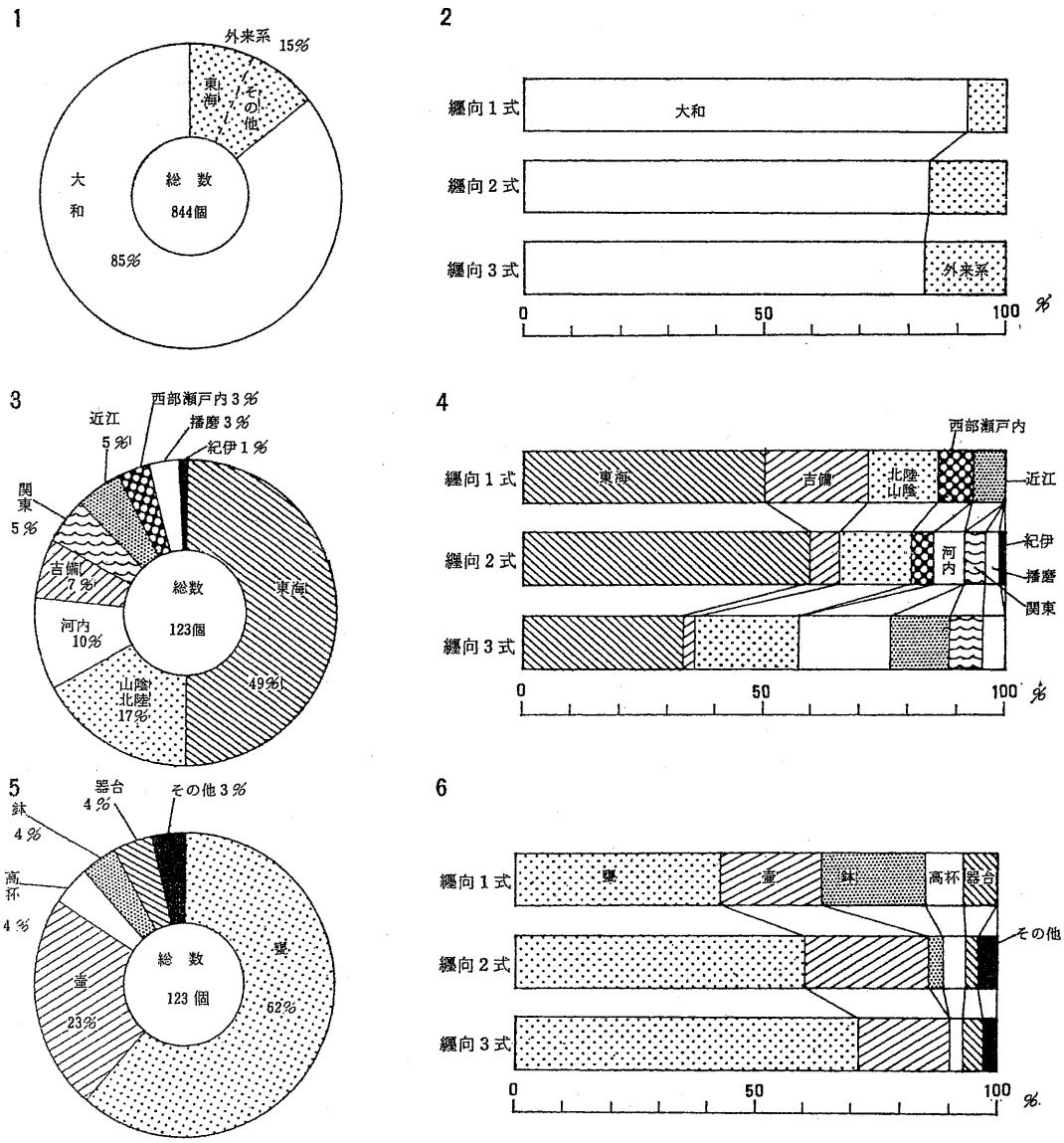


表1　纒向遺跡出土外来系土器の比率

図11　辻地区溝出土墨書土器（第７次　１／１）

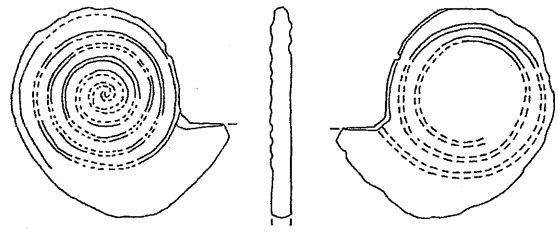


図12　辻河道出土銅鐸飾耳（第７次２／３）

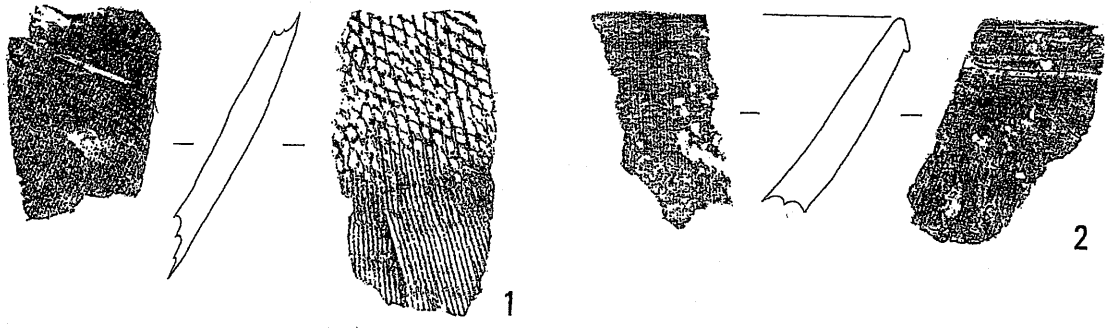


図13　家ツラ地区出土韓式系土器（第90次　１／２）

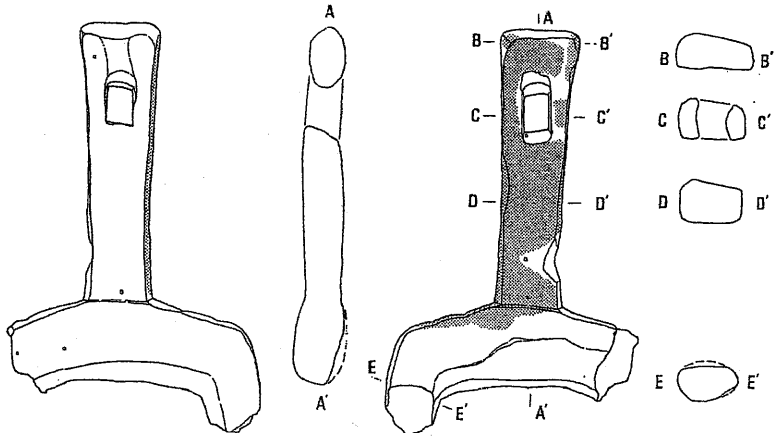


図14　箸墓古墳周濠上層出土木製輪鐙（第109次　１／３）

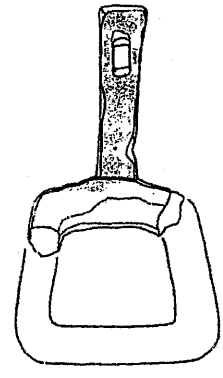


図15　木製輪鐙　復元図

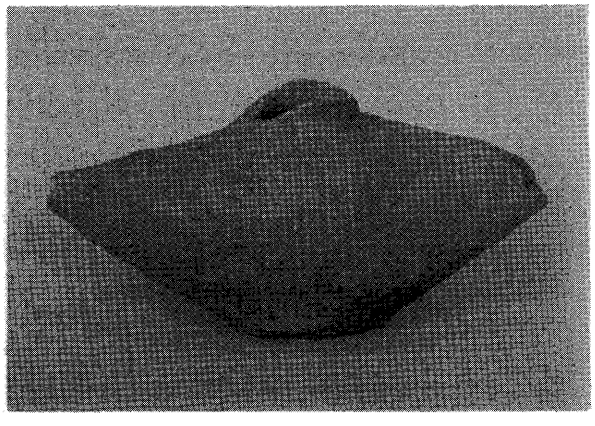


図16　メクリ地区出土鳥形土器
（第47次　高さ5.9㎝）

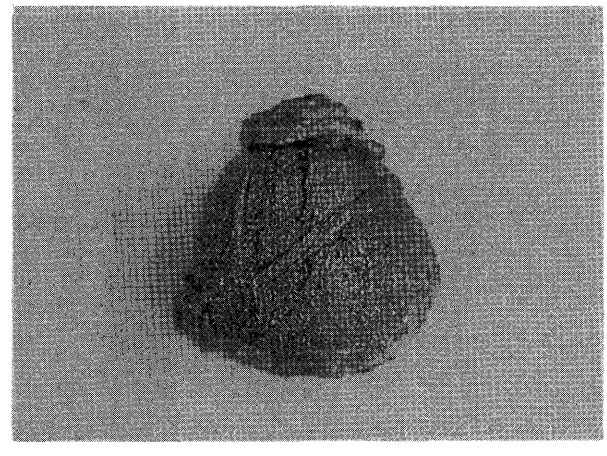


図17　尾崎花地区出土巾着状絹製品
（第65次　高さ3.4㎝）

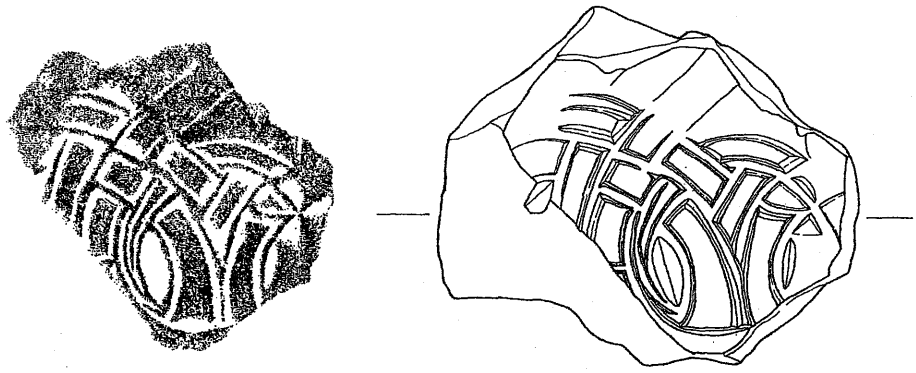
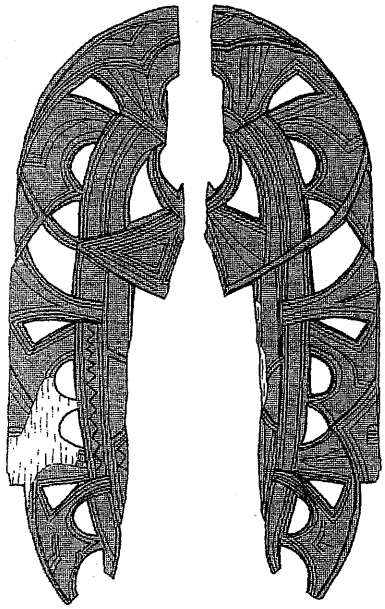
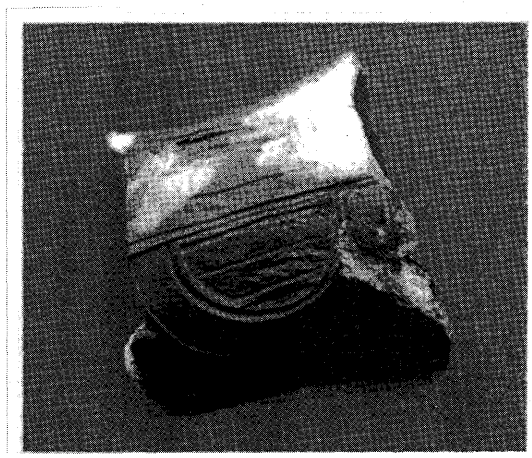


図18　東田地区出土弧文石（第36次　1／1）





左　図19　家ツラ地区出土弧文板（第50次　1／3）
右　図20　南飛塚古墳周濠出土把頭（第51次　全長4.2cm）

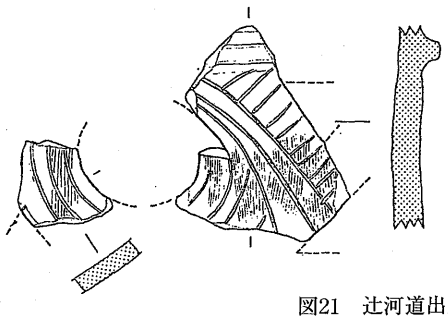


図21　辻河道出土特殊埴輪（第７次　実測図：1／3　拓本：1／2）

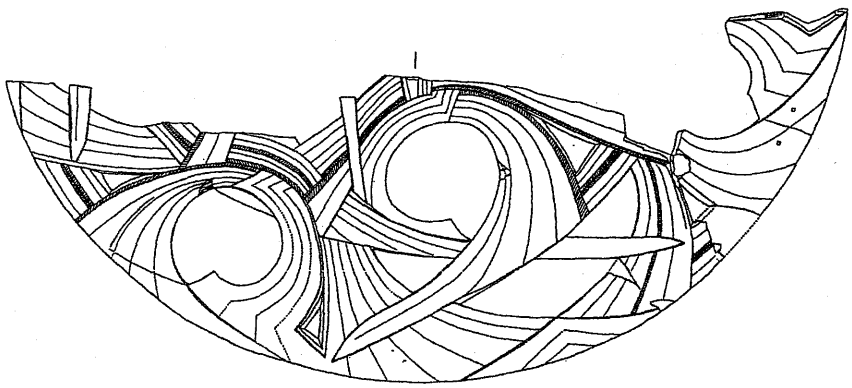


図22　纒向石塚古墳周濠出土弧文円板（第８次　1／5）

遺　跡　名（時代）	鋤	鍬
大和・唐古・鍵遺跡（弥生・前）	30%	70%
和泉・池上遺跡（弥生・前）	40	60
伊勢・納所遺跡（弥生・前）	27	73
近江・大中の湖南遺跡（弥生・中）	12	88
和泉・池上遺跡（弥生・中）	35	65
大和・唐古・鍵遺跡（弥生・後）	50	50
静岡・登呂遺跡（弥生・後）	25	75
福岡・辻田遺跡（弥生・後～古墳・前）	5	95
播磨・長越遺跡（古墳・前）	30（60）	70（40）
大和・纒向遺跡（古墳・前）	95	5
福岡・湯納遺跡（古墳・前）	33（38）	67（62）
近江・滋賀里遺跡（古墳・前～後）	50	50
千葉・菅生遺跡（古墳・後）	27（39）	73（61）

（註）註26の資料を参考として出土総数10点以上の遺跡に限る。
（　）はナスビ状農具を鋤とした比率を示す。

表2　遺跡出土の鋤と鍬の比率

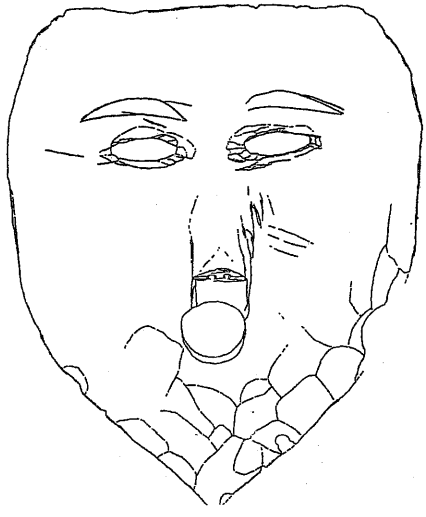


図23　木製板面略測図（第149次　1／4）

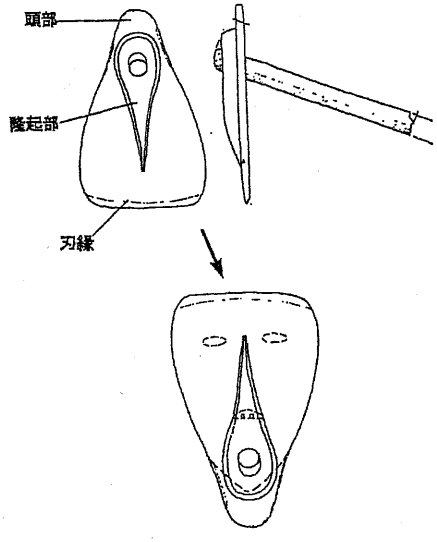


図24　木製鍬からの転用方法

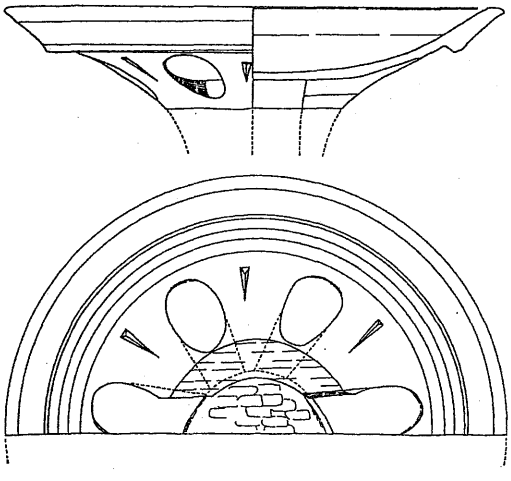


図25　辻土坑4出土木製高坏（1／7）

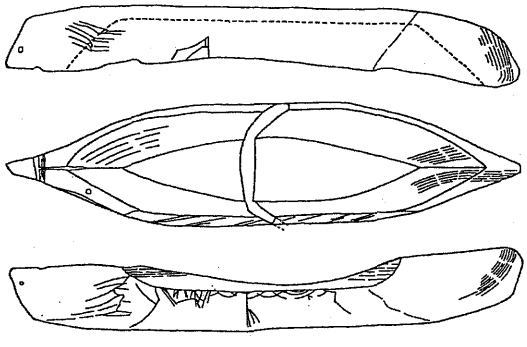


図26　辻土坑4出土舟形木製品（第7次　1／6）

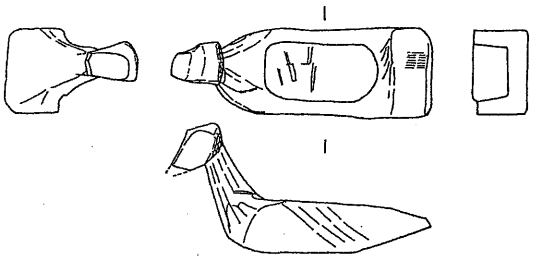


図27　辻土坑４出土鳥舟形木製品（第７次　１／６）

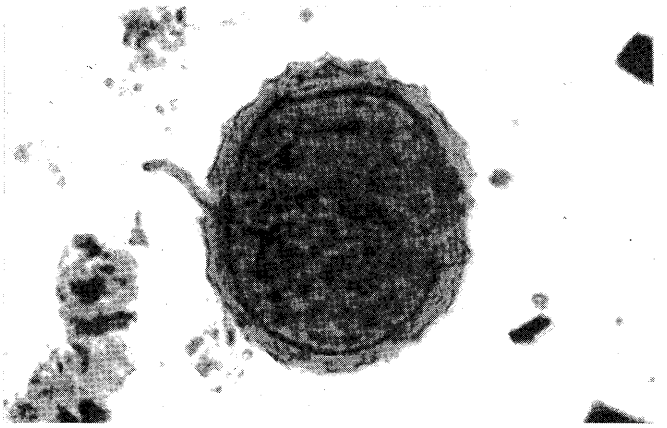


図28　ベニバナノ花粉（第61次）

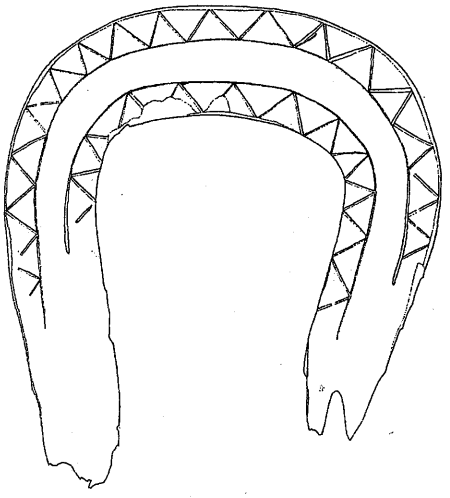


図29　勝山古墳周濠出土木製品（第122次　１／10）

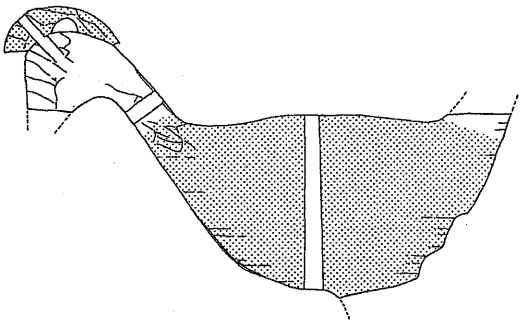


図30　纒向石塚古墳周濠出土鶏形木製品（第８次　１／６）

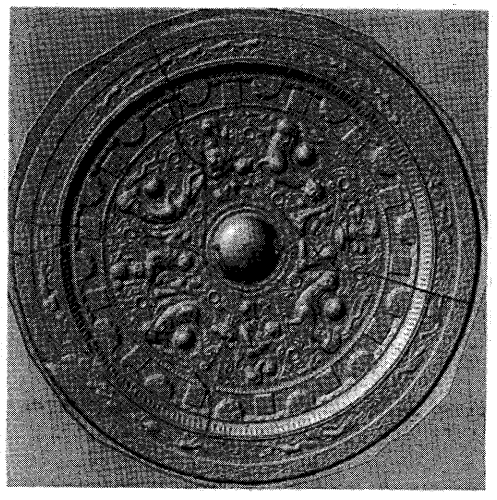


図31　ホケノ山古墳出土画文帯神獣鏡
（第115次　面径19.1㎝）

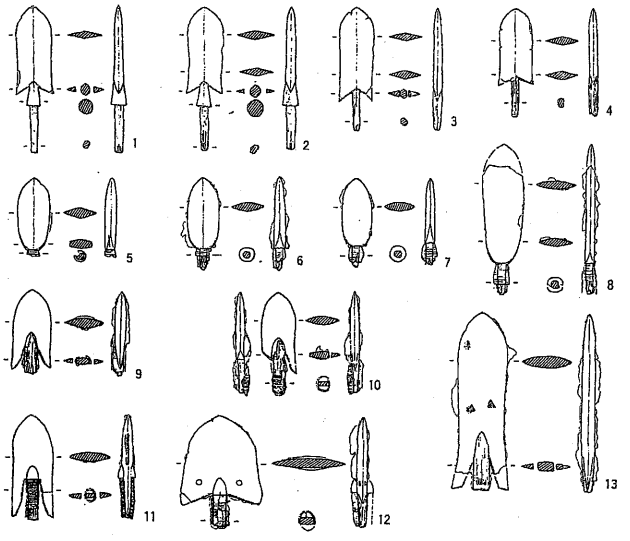


図32　ホケノ山古墳出土銅鏃・鉄鏃（第115次　１／４）

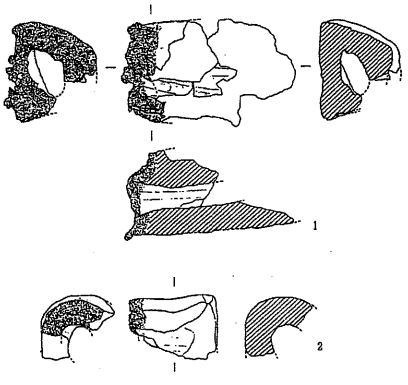


図33　フイゴ羽口（第102次　１／８）

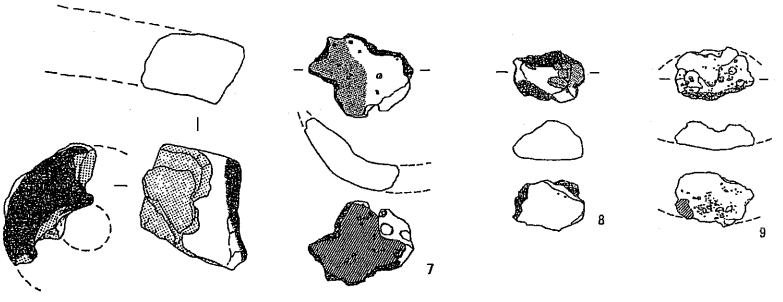


図34　フイゴ羽口と鉄滓（第80次）

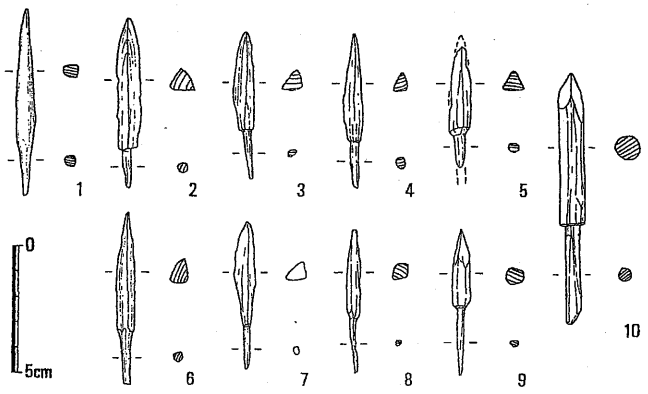


図35　纒向遺跡出土の木製鏃（1／3）

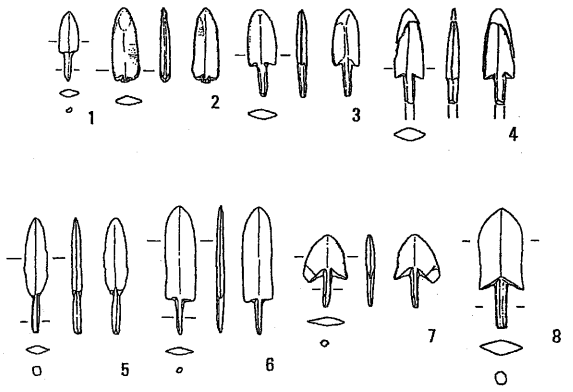


図36　纒向遺跡出土の銅鏃（1／3）

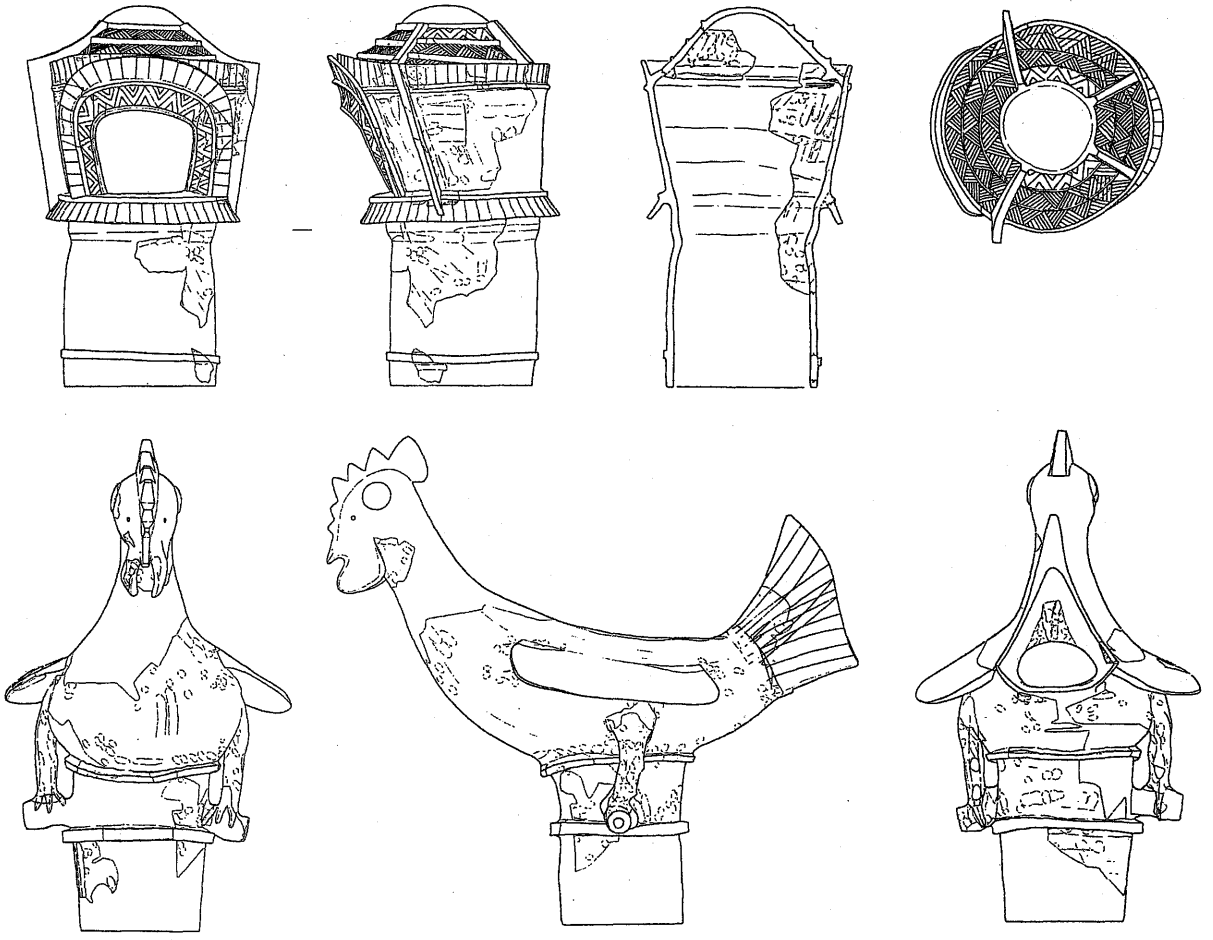


図37　坂田地区出土の冠帽形埴輪と鶏形埴輪（第42次　1／12）

〔図・表の出典および主要参考文献〕

1．石野博信・関川尚功『纒向』橿原考古学研究所 1976
2．寺沢薫「大和弥生社会の展開とその特質」『橿原考古学研究所論集　第四』吉川弘文館 1979
3．木村房之「考古建築物の尺度の発見」『歴史と人物』146　中央公論社 1983
4．寺沢薫「纒向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集　第六』吉川弘文館 1984
5．石野博信「報告書『纒向』以後の調査成果と新知見」『大和考古資料目録　第18集　纒向資料（1）』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1991
6．寺沢薫『王権誕生　日本の歴史02』講談社 2000
7．石野博信『大和・纒向遺跡』学生社 2005
8．安井隆浩「奈良県纒向遺跡の立地基盤と古地形環境」『東田大塚古墳』（財）桜井市文化財協会 2006

※各調査報告書・概要報告書については紙幅の関係上割愛いたしました。御容赦下さい。